

## ローカルなタウン情報誌による避暑地「軽井沢」の表象

——高原誌『軽井沢ヴィネット』の分析をもとに——

前田 一馬\*

### I. はじめに

長野県の東部に位置する軽井沢町は(第1図)、日本有数の避暑地・別荘地として発展してきた。『軽井沢町誌』によると、1970年代後半、軽井沢を特集する雑誌が急増し、なかには若い観光客の喧噪や狂態を興味本位で取り上げ、現実とはかけ離れた扇情的な記事もたびたび掲載されたという<sup>1)</sup>。そもそも軽井沢は明治期以降に開発された別荘地であり、富裕層向けの避暑地として広く知られた場所であった。すると、1970年代の軽井沢は、高級別荘地・避暑地といった場所イメージにくわえて、大衆化した軽井沢像が一般に流布されていたことがわかる。本稿は、そのような時期を起点として、軽井沢からおもに東京を中心とした都市圏に向けて情報を発信する、ローカルな雑誌メディアに着目し、場所の表象を通じて創出されたイメージを解き明かす試みである。

日本の地理学における場所イメージに関する研究は、観光地のファッションナブルな場所イメージがどのように創り出されたのかを明らかにした原田<sup>2)</sup>を嚆矢としている。原田が研究資料としたのは、「アンノン族」

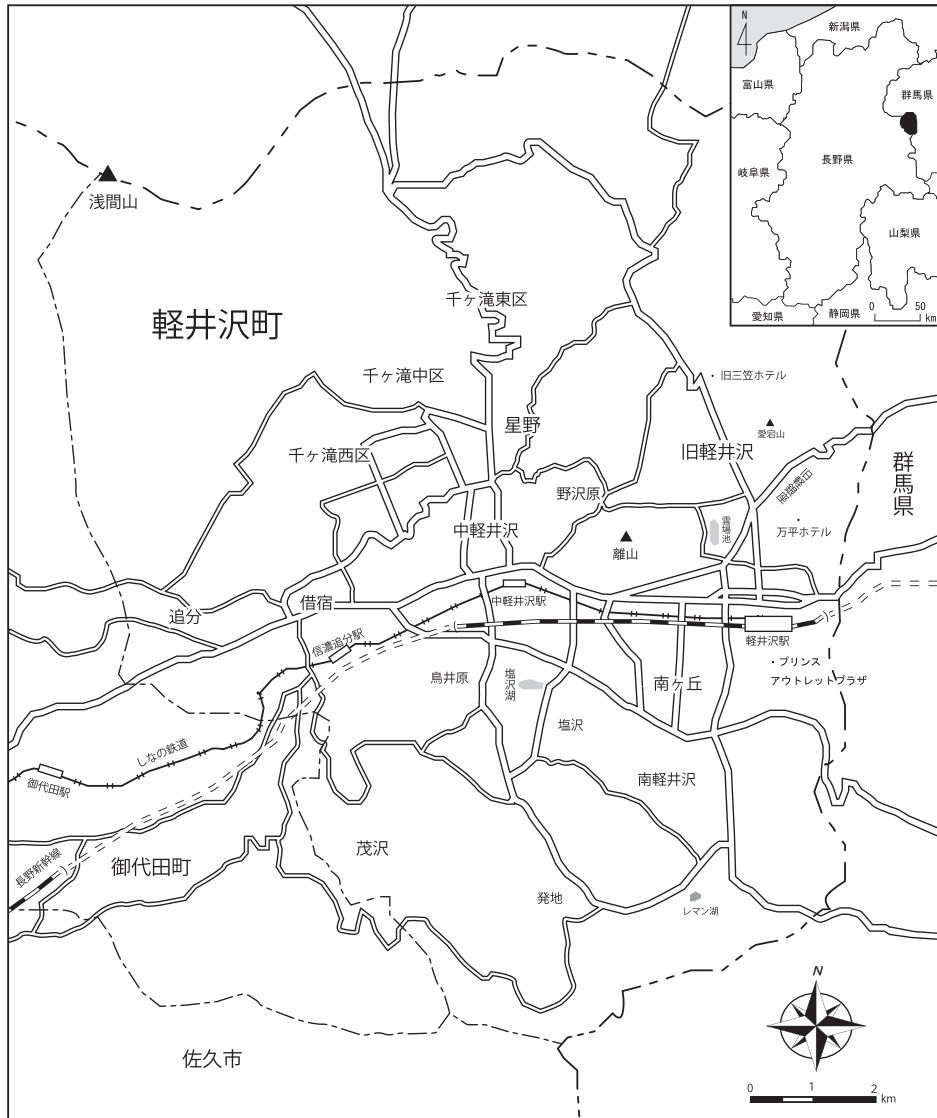
と称される若い女性観光客の独特な行動・スタイルを生み出すきっかけとなった、『an・an』『non-no』という全国誌の旅行記事であった。その後、1980～90年代を通じて、メディアによる場所イメージの創出に多くの関心が払われるようになり、例えば、文学作品・新聞を用いて軽井沢の高級イメージの定着と地名の拡大を明らかにした内田の研究<sup>3)</sup>や、諸種の雑誌記事における特集の経年変化を詳細に追うことで代官山の「商品化」とその消費の過程を明らかにした成瀬の研究<sup>4)</sup>があらわれた。さらに、若者の盛り場としての「下北沢」の創出を明らかにした三上の研究<sup>5)</sup>においても、雑誌の表象分析が行なわれている。また近年では、GISを利用してタウン情報誌による京都の「街」の表象を分析した木田の研究<sup>6)</sup>がある。

これらの研究で資料として用いられたのは、主に女性向け雑誌『an・an』『non-no』『Hanako』、男性向け雑誌『平凡パンチ』『宝島』、タウン情報を掲載する『Kansai Walker』『Meets Regional』などの雑誌メディアが大半を占める。このような雑誌メディアを分析する研究は、地理的記述を検討し、場所の記号内容、つまり表象をめぐる文化地理学的ア

\* 立命館大学大学院文学研究科・院生

キーワード：表象、場所イメージ、アイデンティティ、タウン情報誌、軽井沢

Key words：Representation, Place Images, Identity, Local Magazine, Karuizawa



第1図 研究対象地域

ブローチが主流である。成瀬が指摘するように、雑誌メディアは、街（地域）がどのように表象されるかを示すだけでなく、それが媒介することによって結ばれる社会関係をも捉えることができるという点において<sup>7)</sup>、有効な資料であると考えられる。

他方で、街（地域）に対するアイデンティを体現する雑誌メディアとして、「タウン誌」

と呼ばれるジャンルがある。田村はタウン誌を、街の映画・演劇・スポーツのイベント、ショッピング案内を掲載した雑誌である、と広く定義づけている<sup>8)</sup>。また、彼は1950年代に商店街のPR誌として登場した『銀座百点』を第一世代（タウンPR誌）と位置付けたうえで、第二世代のタウン・サロン誌を経て、1970年代前後に生まれ、街（地域）に

関する情報がより充実した、京都の『フリータウン』や『新宿プレイマップ』などをタウン誌の第三世代とし、それらを特に「タウン情報誌」<sup>9)</sup>と呼んでいる。このタウン情報誌という雑誌形態は、1970年代後半に全国にひろがったタウン誌ブームの中心にあった。ブームの背景として、過度な中央集権への疑問と地域主義の再認識が指摘されている<sup>10)</sup>。そのような意識を基盤として創りだされるタウン情報誌は、ローカルなアイデンティティの表出とその強化に結び付くものであり、また地域の文化的側面を映し出すメディアであるとも考えられる。

本稿では、こうした地方からの情報発信、地域に根ざしたローカルなタウン情報誌にみられる、場所にまつわる地理的表象に注目

する。具体的には、避暑地・別荘地であることを核とした観光地として、多くの人々によって「まなざされる」場所である軽井沢に根ざしたローカルなタウン情報誌—高原誌『軽井沢ヴィネット』—を用いることとする。冒頭で指摘したように、1970年代以降に大衆化していく軽井沢を、高原誌たる『軽井沢ヴィネット』は一体どのように表象してきたのだろうか。

以下、まず第Ⅱ章では、避暑地としての軽井沢の系譜と『軽井沢ヴィネット』について概観し、続く第Ⅲ章では年代別の特集・記事の推移のなかで表象される軽井沢とその場所イメージを検討する。そして、第Ⅳ章では場所イメージが果たす役割について考察し、第Ⅴ章で結論を提示する。

第1表 軽井沢のあゆみ

年	主な出来事	年	主な出来事
1886	A.C. ショーが訪れる	1954	スケート場が町内で8リンクに
1888	A.C. ショー別荘建設	1957	明仁親王、正田美智子と出会う (いわゆるテニスコートのロマンス)
1893	碓氷峠線、横川—軽井沢間(アプト式鉄道)開通	1958	別荘2000戸超
〃	八田裕二郎、日本人別荘第1号建設	〃	善良なる風俗に関する条例公布
1894	亀屋旅館、万平ホテルへ改称	1963	世界スピードスケート大会
1897	軽井沢合同基督教会創立	1964	東京オリンピック馬術競技開催
1906	三笠ホテル開業	1972	自然保護対策要綱制定
1908	主義方針「娯楽を人に求めずして自然に求めよ」	1973	『an・an』『non-no』で紹介される
1913	軽井沢避暑団結成(現・軽井沢会)	1974	マンション第1号開業
1915	野沢源次郎の別荘開発	1976	ジョン・レノン一家避暑
1917	大隈重信が別荘建設	1986	軽井沢避暑地100年式典
1918	堤康次郎、千ヶ滝の開発に着手	〃	(この時期からタレントショップが出現)
1920	室生犀星が訪れる	1993	上信越自動車道開通
〃	軽井沢ゴルフ倶楽部創立	1995	軽井沢プリンスアウトレットプラザの開業
1923	摂政宮殿下(後の昭和天皇)が避暑	1997	北陸新幹線(長野新幹線)開通
〃	堀辰雄が訪れる	1998	長野オリンピックカーリング競技開催
1924	芥川龍之介が訪れる	2001	マンション軽井沢メソッド宣言
1931	軽井沢競馬場開設	2005	軽井沢まちなみメソッド宣言
1945	米軍にホテルが接収される	2007	軽井沢町まちづくり基本条例制定
1951	軽井沢売春取締り条例公布	2012	都市デザイン室を設置
〃	軽井沢国際親善文化観光都市建設法公布	2013	地域交流施設「くつかけテラス」開業
1953	浅間演習地問題白紙撤回		

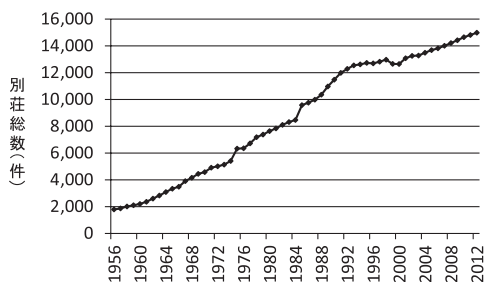
『軽井沢町誌』(民俗編・歴史編)、『軽井沢町勢要覧2013』、『軽井沢ヴィネット』No. 71・特別号より作成。

## II. 研究対象地域・研究資料

### 1. 避暑地軽井沢の系譜

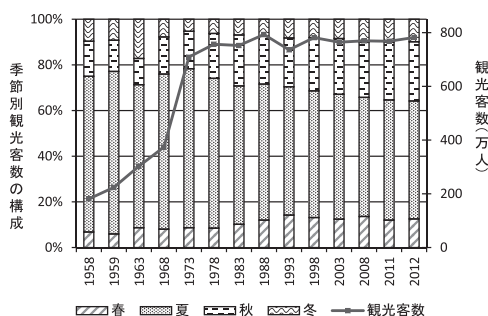
軽井沢の避暑地としての歴史は、1886（明治19）年に宣教師A.C.ショーが訪れ、翌々年別荘を建設したことにはじまる（第1表）。多くの外国人別荘は、おもに見晴らしのよいあたごやま愛宕山中腹に建設され、また、相次いで開業した西洋式ホテル（万平ホテル・三笠ホテル）は、別荘を持たない外国人の誘致に大きな役割を果たした<sup>11)</sup>。その一方で、海軍大将の八田裕二郎が日本人で初めて別荘を建設したことは、後に上流階級（桂太郎、新渡戸稲造ら多数）が別荘を所有する契機となった<sup>12)</sup>。大正期になると、箱根土地会社（のちの国土計画）や実業家による別荘開発が進み、別荘数は1913（大正2）年に216件であったものが、1935（昭和10）年には1,194件へと増加した<sup>13)</sup>。さらに昭和戦前期には宮家の別荘建設も進み、結果として外国人をはじめ日本の上流階級、俳人・作家（室生犀星、堀辰雄、芥川龍之介、川端康成）など、さまざまな人々が集まる避暑地・別荘地へと成長してゆく<sup>14)</sup>。

戦後になると、軽井沢は国際親善文化観光都市建設法に基づいて、「宣教師によって開かれた健康的で清潔な町、国際的な親善の町」として認められた（1951年）<sup>15)</sup>。米軍の接収解除や条例の整備が進み<sup>16)</sup>、避暑地として新たなスタートを切ったのも、この時期のことである。さらに冬季の観光客の誘致を進めるべくスケートリンクが開設され、現在もウィンタースポーツの誘致が積極的に行なわれている<sup>17)</sup>。1958（昭和33）年には明仁親王と美智子妃の婚約が発表され、二人の出会いが軽井沢のテニスコートであった



第2図 別荘数の推移

軽井沢町教育委員会『軽井沢ガイドブック』、軽井沢町観光経済課『軽井沢案内』より作成。



第3図 季節別観光客数の構成と観光客数の推移

軽井沢町教育委員会『軽井沢ガイドブック』、軽井沢町観光経済課『軽井沢案内』より作成。

ことから、軽井沢は「テニスコートのロマンス」の地として脚光を浴び、1960年代のテニスブームを引き起こすこととなった。

軽井沢が『an・an』（1970年創刊）、『non-no』（1971年創刊）において初めて紹介されたのは1973（昭和48）年のことであり、この時期の別荘数に目を向けてみると、一定した増加傾向を示しているものの（第2図）、観光客数に関しては1970年代の初頭に急増していることが読み取れる（第3図）。このことは、別荘所有者（いわゆる別荘族）と質的に属性が異なる一般の観光客の流入を示すと考えられる。つまり、1970年代のアンノン族と称される若い女性の来訪や、ペンションブーム、1980年代のタレントショップ<sup>18)</sup>の開業などの影響で多くの若者が訪れたことによ

り、これまでとは違う軽井沢の消費傾向が生まれ、そのような意味で大衆化が進んだと言えるのではあるまいか。以上のように、この時期が軽井沢の転換期であることは明らかであろう。

1990年代に入り、高速道路（1993年）や長野新幹線（1997年）の開通など、高速交通網の整備が進み、交通の利便性が向上したことで、東京方面への通勤も可能になったことから、新たな定住者も現れはじめた。軽井沢駅裏に開設された軽井沢プリンスショッピングプラザは、観光客の消費行動や商業環境に影響を及ぼし、その結果、街の空間的な変容にも少なからず変化を及ぼしていると考えられる。また、乱立する別荘やマンション建設を防ぐために、町当局はさまざまな要綱を制定している<sup>19)</sup>。近年、中軽井沢駅の駅舎新設に伴って、図書館に併設された地域交流施設が建設されたほか、町を横断する国道沿いに、これまで見られなかった飲食チェーン店や大手家電量販店の進出が相次ぎ、交通の結節点やロードサイドの景観は様変わりしており、今まさに避暑地・別荘地、そして観光地としての軽井沢のあり方が問われているのである。

## 2. 研究資料

本稿で研究資料とする『軽井沢ヴィネット』は（第4図）、軽井沢新聞社が1979（昭和54）年の夏に創刊した『軽井沢めいと』を前身とするタウン情報誌である。『an・an』『non-no』で紹介されて以来、軽井沢は頻繁にメディアで特集されるようになり、上流階級の別荘地から若者の観光地へと移行していく時期であった。しかしながら、当時、軽井沢を訪れる若者は、原宿のようなアパレル系の路面店や雑貨店の建ち並ぶ、「旧軽井沢銀座」<sup>20)</sup>

を通り過ぎていただけだったという。創刊時の編集長は、そのような大衆化された軽井沢の「表層に戯れる」<sup>21)</sup>若者に、詩情あふれる風景や独特な歴史や文化・自然などの魅力を知ってもらいたいと、『軽井沢めいと』の刊行を思い立ったという<sup>22)</sup>。この発言からは、『an・an』『non-no』などの都市的な全国誌を明らかに意識し、それに対抗する形で『軽井沢めいと』を創刊したとみることもでき、1970～80年代の大衆化が進む軽井沢の状況も関係して生みだされた雑誌と位置づけることができる。

当時の『軽井沢めいと』は、軽井沢だけで流通する、まさに局所的なタウン誌であったものの、第14号からは、その名を高原誌『軽井沢ヴィネット』（以下本文中では、『ヴィネット』と略）と改めると同時に、年間発行部数を3～5万部へと増やし<sup>23)</sup>、東京を中心とする都市圏へも流通させるようになった。タウン情報誌は本来、限られた地域内の構成員に向けて発信されるものであるのだが、『ヴィネット』は脱ローカル志向の雑誌



第4図 『軽井沢ヴィネット』  
軽井沢新聞社『軽井沢ヴィネット No. 113』、軽井沢新聞社、2013の表紙より（提供：軽井沢新聞社）。

として生まれ変わったと言える。読者層は、軽井沢を訪れる観光客や別荘所有者であり、編集部の言葉を借りるならば、軽井沢を「ふるさと」のように思っている人々も含めた「軽井沢人」を対象とし<sup>24)</sup>、読者層は学生や会社員、主婦まで幅広い。

また、“高原誌”とは『ヴィネット』編集室が独自につけた呼称である。タウン情報誌という言葉は都市の雑然としたイメージを喚起し、軽井沢にはそぐわないと思われた。そこで、軽井沢のイメージに合うネーミングとして考案された名称が“高原誌”である<sup>25)</sup>。このネーミングからは、一般にタウン情報誌と呼ばれている雑誌とは差異化を図り、イメージ面でも独自性をつくりだそうという姿勢がうかがわれる。

本稿で分析対象とするのは、『ヴィネット』の創刊号(1979年)から113号下巻(2013年)までである。特集や個別の記事のフレーズ、形容詞、修辞法などに着目することで表象分析を行ない<sup>26)</sup>、誌面における表象を通じて創出された〈軽井沢〉イメージに検討をくわえることとしたい。

### Ⅲ. 『軽井沢ヴィネット』にみる軽井沢の表象

本章では、特集や個別の記事の特徴を時代別に整理し、その変化を明らかにすることで、場所イメージの内実を浮き彫りにしてみたい。以下、『ヴィネット』からの引用はカギ括弧でくくり、号数・西暦・頁をあわせて表記する。『ヴィネット』における、おもな特集記事は、第2表にまとめた。

#### 1. 『軽井沢めいと』期における軽井沢の表象

創刊号の表紙では、「ガイドブックじゃな

いよ！軽井沢を愛する仲間集まれ！」と、既存の雑誌との違いを謳い、自誌の方向性を端的に表現している。『軽井沢めいと』のナップ写真や「おしゃべりサロン」<sup>27)</sup>と題した読者からの投稿を紹介する記事で登場するのは20代の若者が多く、「別荘気分できつろげるペンション」(No. 8, 1981, 42頁)、「ワンポイントテニスレッスン」(同40頁)など、当時ブームであったペンションやテニス関連の記事が数多く見られ、若者を意識した構成となっていた。

しかしながら、「避暑地」として知られる軽井沢のオフシーズンの描写は、別の特色を帯びる。秋は「夏の喧噪が通り過ぎて、軽井沢らしい情景にもどり」(No. 2, 1979, 2頁)つつあり、冬の「別荘地帯は静寂なメルヘンの国」(No. 3, 1979, 2頁)といったように、夏以外の知られていない軽井沢の一面を描き出す。

さらに、「おしゃべりサロン」では「静かな軽井沢が好き」(No. 8, 1981, 48頁)という素直な意見を取り上げ、「銀座通りは東京と同じようで、あまり行きません」(No. 5, 1980, 21頁)、「大学時代から来ているが俗化されたのが残念」(No. 6, 1981, 11頁)、「冷夏で軽井沢が本来の“静かな軽井沢”に戻ってよかったじゃない」(同上20頁)と「旧軽井沢通りが雑誌等で特にとりあげられ、もてはやされている」(No. 12, 1982, 41頁)時代のなか、騒々しい夏の軽井沢ではない“静かな軽井沢”という場所イメージが逆説的に読者の声をもとに強調される。また、軽井沢は「故郷」(No. 11, 1982, 19頁)であるという別荘所有者<sup>28)</sup>の言葉を取り上げ、同時に観光客が多く押し寄せる夏の軽井沢の変化や、喧騒の広がる旧軽井沢に行く必要はな

第2表 『軽井沢ヴィネット』のおもな特集記事

年	No.	特集	年	No.	特集
1979	1	ウェディングイン軽井沢	1996	65	軽井沢 110 周年記念 快適な別荘空間
1979	2	あなたらしさを見つける軽井沢の秋	1996	66	軽井沢不思議の文学
1979	3	冬の軽井沢パラエティマップ	1997	67	軽井沢に移り住む
1980	4	緑とそよ風のヘルシーメニュー	1997	68	軽井沢をめぐる音楽
1980	5	ジョイフルマップ&ガイド	1997	69	開催直前!長野オリンピック二度目の軽井沢、そして長野
1981	6	お店ガイド	1998	70	軽井沢グルメ百科
1981	7	軽井沢行動派カタログ	1998	71	軽井沢の別荘
1981	8	緑につつまれていた今…「軽井沢の道」	1998	72	軽井沢ヴィネット 20 周年
1982	9	静かな静かな軽井沢別荘物語	1998	73	浅間三宿に行く
1982	10	高原ライフへの提案	1999	74	軽井沢でリフレッシュ
1982	11	旧き良き時代に軽井沢の心を探る	1999	75	地域で見る軽井沢
1982	12	ロマン色の秋	2000	76	花色に染まる軽井沢
1982	13	ワイン&パーティ	2000	77	ヴィネット流ガイド
1983	14	緑の中の生活の提案	2000	78	贅沢な季節
1983	15	白い世界へ	2001	79	アトリエからの招待状
1984	16	緑とそよ風のヘルシーメニュー	2001	80	別荘訪問特集
1984	17	いま、フリーに時を過ごす。	2001	81	暖炉&薪ストーブのある暮らし
1984	18	冬だから、面白い!	2002	82	軽井沢教会物語
1985	19	心は春 軽井沢のウェディング大研究	2002	83	軽井沢食紀行
1985	20	軽井沢一世紀への前奏曲	2002	84	碓氷峠鉄道物語
1985	21	サンライズ・サンセット	2003	85	再発見 浅間山の魅力
1986	22	軽井沢花物語	2003	86	スローライフな軽井沢
1986	23	軽井澤百年	2003	87	冬も軽井沢で過ごしたい
1986	24	風のエアメール オフシーズン特集	2004	88	軽井沢スタイルの家 軽井沢ウェディング
1987	25	浅間山	2004	89	25 周年「想い出の扉をあけて」
1987	26	軽井沢ライフエッセンス	2005	90	軽井沢ルネッサンス
1987	28	軽井沢ですごく素敵な時間	2005	91	別荘訪問 軽井沢暮らしを私流に楽しむ
1988	29	ハーブのある暮らし	2005	92	軽井沢に移り住んで小さな店を持つ
1988	30	軽井沢らしく過ごしたい	2006	93	軽井沢の土地探し
1988	32	軽井沢教会物語	2006	94	避暑地軽井沢 120 周年記念
1989	33	軽井沢に別荘を建てるには	2006	95	軽井沢・贅沢な季節
1989	34	軽井沢霧物語	2007	96	緑の花とそよ風とウォーキング
1989	36	それぞれの軽井沢ストーリー	2007	97	霧があるから軽井沢は美しい 霧物語
1990	37	風のエアメール II	2007	98	軽井沢でワイン&パーティ
1990	38	軽井沢に別荘を持つ	2007	99	軽井沢ヴィネット 100 号記念特集 前編
1990	39	高原交響曲が聞こえる	2008	100	軽井沢ヴィネット 100 号記念特集 後編
1990	41	軽井沢秘境探険・総特集	2008	101	地元カメラマンと歩く
1991	43	春の高原を楽しむ・パート I	2009	102	素材にこだわるシェフの店
1991	44	軽井沢個性派別荘ライフ	2009	103	三笠ホテル物語 その栄華と衰退
1991	46	感性を磨く一軽井沢	2009	104	軽井沢の達人がおすすめる名店
1992	48	グリーン特集:そよ風を感じる軽井沢の庭	2010	105	暖炉・薪ストーブのある暮らし
1992	50	軽井沢の食文化考	2010	106	高原の朝を満喫 軽井沢で朝食を
1992	51	軽井沢は自由時間のコミュニティ	2010	107	うつろい考現学—社交編—
1993	53	樹々に囲まれて;緑のある暮らしと風景	2010	108	続・うつろい考現学—住まい編—
1993	54	軽井沢の住空間	2011	109	軽井沢食紀行
1993	56	文学の薫りにつつまれて…	2011	110	避暑地軽井沢 125 周年 軽井沢の別荘
1994	58	リゾート軽井沢で上質のおしゃれを楽しむ	2012	111	贅沢に味わう、心躍るこの逸品
1994	60	軽井沢・人間ウォッチング	2012	112	軽井沢食紀行 実践編
1995	61	軽井沢に別荘を建てるには	2012	113	別荘の食卓
1995	62	避暑地・軽井沢に食す	2013	112	軽井沢と恋 (後編)
1995	63	秋から冬へ…静かな軽井沢の一週間	2013	113	軽井沢で健康になろう
1996	64	軽井沢・庭に楽しむ			

注: 27号、31号、35号、40号、42号、45号、47号、49号、52号、55号、59号は イベント特集号。

軽井沢新聞社『軽井沢めいと』『軽井沢ヴィネット』の表中の各No.より作成。

い<sup>29)</sup>、ことが語られるのである。

「緑とそよ風のヘルシーメニュー」(No. 4、1980、2頁)、「静かな静かな軽井沢の別荘物語」(No. 9、1982、6頁)や「自然の中に身を置いて野鳥との出会いを楽しもう」(No. 10、1983、6頁)では、野鳥や草花などの自然が紹介される。堀辰雄のゆかりの地である追分は「モダンな旧軽井沢とは趣のちがった」(No. 11、1982、9頁)場所であるという歴史的な情緒が紹介される。また「誌上討論会」という記事では、町長や建築家、経営者など軽井沢に関わる有識者が登場し、軽井沢のあり方についての意見が掲載される。このような、軽井沢のあり方をめぐる記事は、のちに、街に変化をもたらす出来事を取り上げる座談会などの形式で記事になっていく。さらにここで指摘しなければならないのは、軽井沢にゆかりのある人に語らせること、つまり人の営みを通して軽井沢を描き出していくという記事の特徴である。

以上のような記事は『ヴィネット』においても受け継がれ、さまざまな顔をもつ軽井沢の多様性が表象されていくのである。

## 2. 避暑文化の表象—1980年代—

14号(1983年)から『ヴィネット』へと名称が変わり、別荘所有者の軽井沢ライフを紹介する「別荘訪問」が本格的に始まる。また、「軽井沢の野鳥」<sup>30)</sup>や「軽井沢文学散歩」<sup>31)</sup>、「軽井沢秘境探検」<sup>32)</sup>の連載、「実用ガイド&マップ」などの最新のタウンガイド<sup>33)</sup>が充実しはじめるのも、この時期のことである。別荘訪問「時はゆっくり流れ人々は自由な空気に触れた」(No. 17、1984、10頁)、「私の別荘ライフ」(No. 22、1986、10頁)、「軽井沢ライフエッセンス」(No. 26、1987、8頁)などの記事では、別荘所有者それぞれのライ

フスタイルが語られるが、それらに共通するのは、軽井沢の豊かな自然を純粹に感じながら過ごす別荘生活である。つまり、軽井沢の自然は「別荘訪問」という記事を通して、別荘所有者という伝統的な消費者の声のもとに軽井沢での経験を特徴づけるシンボルとして描き出されていくのである。そのような記事は、「軽井沢で過ごす素敵な時間」(No. 28、1987、9頁)、「自然と語る散歩道」(No. 32、1988、10頁)があるが、なかでも特集「軽井沢らしく過ごしたい ゆるやかな時間」(No. 30、1988、14頁)には、以下のような興味深い記述もみられた。

避暑地軽井沢の歴史を見ても、外国人宣教師や外交官、貴族、政財界の人々…皆、ここでは自由な空気に触れ、のんびりと過ごしていた。ところが最近多いのが、1泊2日、軽井沢2泊3日の避暑気分という過ごし方。これでは本当の軽井沢に触れることはちょっと難しい。最低5日間は滞在し、自然と語りあうといい(同上)。

これは編集部による記述であるが、自然のなかでゆったりと自由に過ごすという、先人たちが営んだ避暑生活を織り込みつつ、軽井沢という場所消費のしかたがあえて取り上げられている。この記述の背景には、新たな観光客によるこれまでと異なった消費のしかたに対する異議申し立ての意図があると考えられる。

一方、「歴史で綴る教会の話」(No. 15、1983、9頁)、「新しく、古き良き軽井沢を発見した」(No. 16、1984、37頁)、「軽井沢一世紀への前奏曲」(No. 20、1985、11頁)、「軽井澤百年」



(No. 23、1986、10頁)など、軽井沢の歴史に関連する特集も多く組まれる。そこでは、軽井沢がA.C.ショーをはじめとする外国人宣教師によって築かれた歴史ある避暑地であり、その系譜が現在でも息づいていることが語られる。このように、『ヴィネット』は戦前の外国人が過ごした避暑地としての歴史性や営みを「別荘文化」と位置づけ、軽井沢を語る上での拠り所になっていることが読み取れる。そして、軽井沢は、そのような歴史的文化的コンテクストのなかで消費されるべき場所であることが強調される。

次に「軽井沢に別荘を建てるには」(No. 33、1989、6頁)と題する特集に注目する。これは全国的なリゾートブームの中で、特に軽井沢に別荘を建てることを望む声が多いことに関連して組まれた特集である<sup>34)</sup>。「軽井沢の別荘、三百坪の広さ五千万円は必要」(同上8頁)と具体的な土地の広さ、金額をも提示し、周囲の自然環境と調和をはかりながら、別荘の原点である外国人宣教師たちが建てたような軽井沢らしい別荘を建ててほしいと提案する<sup>35)</sup>。これらの記事からは、カラマツなど、二次林の植生のなかに点在する別荘の景観を保っていこうとする意図がうかがわれる。

以上のように『ヴィネット』は、軽井沢での過ごし方を歴史と絡ませて表象しながら、軽井沢の自然を維持していくような提案を行なう誌面づくりに特徴がある。軽井沢の消費や歴史・文化に関する理念的な語りとは別荘の建設に関する実用的な語りは読者へ軽井沢での「過ごし方」や軽井沢に対するまなざしを構築していくと考えられる。

### 3. 「過ごす」から「暮らす」場所へ—1990年代—

この時期は、「軽井沢に別荘を持つ」(No. 38、1990、39頁)、「軽井沢個性派別荘ライフ」(No. 44、1991、23頁)、「軽井沢は自由時間のコミュニティ」(No. 51、1992、15頁)、「軽井沢の住空間」(No. 54、1993、23頁)、「軽井沢に別荘を建てるには」(No. 61、1995、13頁)、「軽井沢に移り住む」(No. 67、1997、10頁)、「軽井沢の別荘」(No. 71、1998、84頁)、「軽井沢で暮らしたい」(No. 73、1999、42-49頁)、「地域で見る軽井沢」(No. 74、1999、19頁)と、前年代の軽井沢で「過ごす」ことにくわえて、「住む」ことへ誌面構成が変化する傾向にある。「別荘を建てるのにはQ&A」(No. 61、1995、33頁)は、土地探しから別荘を建てた後までのさまざまな疑問に答えるものである。また、「消えてしまった別荘」(No. 51、1992、21頁)では、カラマツ林と一体になった別荘景観が掲載され、静けさと哀愁のイメージを喚起させると同時に守っていくべき景観として位置づけられている。

また同時期に特徴的な記事として「食」に関する特集がある。「軽井沢の食文化考」(No. 50、1992、21-24頁)、「避暑地軽井沢に食す」(No. 62、1995、23-28)、「軽井沢グルメ百科」(No. 70、1998、22頁)では、外国人によってもたらされた食文化や来客をもてなす際の食事が紹介され、特集や記事内容は別荘を中心とする別荘所有者向けの実用的なものへと大きく変化している。このことは、1997(平成9)年に開通する長野新幹線への利便性向上の期待感など別荘を持ちたいという読者の潜在的なニーズ等を反映していると考えられる。「速報!軽井沢のおすすめ物件」(No. 69、1997、52頁)という記事が掲載さ

れることは、軽井沢における土地取引が活発になったことを表わしているといえよう。読者からも「いつか軽井沢に別荘を持ちたい」(No. 62、1995、96頁・No. 63、1995、64頁)という声が挙がり、憧れの別荘地として表象されている。土地価格が上昇するバブル期の別荘に関する特集や個別の記事を掲載しているが、軽井沢のなかでとりわけ歴史的由緒を持つ「旧軽井沢」地区以外の土地は、バブル期においても急激に土地価格が上昇しておらず<sup>36)</sup>、そのような地区を掲載ことは別荘購入を考える読者のニーズに一定程度応えているものであったと言えよう。

#### 4. 良質なブランドの表象—2000年代以降—

別荘人気が高まり、移住者が増える時代<sup>37)</sup>のなかで、2001年からは不動産案内の記事が連載されるようになる。「自分にぴったりの土地を探す」(No. 93、2006、98頁)、「軽井沢スタイルの家」(No. 87、2004、16頁)の紹介や「軽井沢に移り住んで店を持つ」(No. 92、2005、92-93頁)ための留意点、その他アドバイスに関する特集なども組まれる。さらには「寒さ対策」(No. 95、2006、114頁)、「湿気対策」(No. 96、2007、92-93頁)と、軽井沢で快適な生活を送るためのアドバイス記事が度々見られるようになる。しかし、100号を過ぎると、別荘の購入や保有に関する記事は減少し、代わって「食」にまつわる記事が目立ってくる。「素材にこだわるシェフの店」(No. 102、2009、32頁)、「軽井沢で朝食を」(No. 105、2010、44頁)、「軽井沢食紀行」(No. 108上、2011、22頁)、「別荘の食卓」(No. 111、2012、18頁)などの特集が組まれるのである。取り上げられる店舗は、軽井沢の有名レストランが多く、これまでは見られなかった贅沢さを重視した良質



第5図 愛宕山通りの景観

注：軽井沢の奥まった別荘地区の周辺にみられる特徴的な景観であり、このような景観は『ヴィネット』において、度々掲載されてきた。

軽井沢新聞社『軽井沢ヴィネット No.103』、軽井沢新聞社、2009、18-19頁、「思い出の道を歩く第15回」より(提供：軽井沢新聞社)。

なブランドのイメージが描き出されている。

一方で、「時は流れても今も続くスピリッツ」(No. 89/90、2005、10頁)、「三笠ホテル物語」(No. 103、2009、22頁)、「別荘文化今昔物語」(No. 106、2010、20-21頁)などの特集や個別の記事において、知っているようで知らない軽井沢の歴史的なエピソードを取り上げることは軽井沢の奥深さとその魅力を存分に伝えている(第5図)。

## IV. 構築された〈軽井沢〉と『軽井沢ヴィネット』の営為

本章では、『ヴィネット』において表象された〈軽井沢〉はどのような意味を持っているのかを考察し、またローカルな雑誌の役割について検討する。

### 1. 排除と強調の言説

軽井沢は、1970年代に多くのメディアに

おいて取り上げられたことで、若者に代表される新しい観光客が訪れ、彼ら自体が演者となるような都市的な空間が局所的に生み出された。その局所的空間とは、軽井沢の避暑文化の中心地であった旧軽井沢に他ならない。新たな観光客の「避暑地気分」という、これまでとは異なる場所の消費のしかたに対して、『ヴィネット』が異議を唱える姿勢はすでに述べた通りである。若者文化や都市性の流入、そして夏期固有の喧騒もまた、軽井沢の景観ないし文化の一要素であるが、このように大衆化する軽井沢に対して、より明確に反対の立場を取ることを示した記事がある。それは「軽井沢の魅力をはきだすために」(No. 33、1989、36頁)における、旧軽井沢に出現したタレントショップなどの都市的な要素に対する記述であり、以下にその一部を抜粋する。

大都会をそのままこの軽井沢に持つてくるのは疑問です。確かに洗練されたアカ抜けたセンスは良いかもしれませんが。しかし、都会そのままの商売では軽井沢の独自性がありません(同上41頁)。

またこれに続けて、単に軽井沢の地名を利用し利益を追求するのではなく、軽井沢の場所性を重んじたうえで、何らかの貢献をするような営業をしてほしい旨を主張する。『ヴィネット』は、このように軽井沢における大衆化の象徴であるタレントショップにはっきりと異議を申し立て、原宿の竹下通りのようにごった返した旧軽井沢銀座の光景を誌面に掲載することは極力避けたという<sup>38)</sup>。さらにタレントショップのみならず、観光客で賑わうショッピングプラザ<sup>39)</sup>などを掲載



第6図 人々で賑わう旧軽井沢銀座通り  
(2009年10月12日 筆者撮影)



第7図 人々で賑わうプリンスアウトレットプラザ  
(2014年8月24日 筆者撮影)

することもほとんどなかった(第6、7図)。

このことは、新しい消費傾向やそれらを創り出すような空間を、軽井沢の地理歴史的な文脈にそぐわない、異質な存在として位置づけ、可能な限り排除する姿勢を示している。第Ⅲ章で明らかにしたように、『ヴィネット』は、軽井沢を描き出す拠り所として、別荘文化を人々の避暑の営みのなかで語り、また歴史的な物語を<sup>3)</sup>表象してきた。これらの物語は、多様な切り口で展開され(第2表)、軽井沢の豊富な地理歴史性を構築しているといえる。佐藤が述べるように、場所それ自体は意味を持たず、表象することが場所に特定の意味をコード化する営みとなりうる<sup>40)</sup>。つまり、この指摘を敷衍するならば、『ヴィネッ

ト』において反復される表象は、軽井沢をまなざす際に軽井沢の歴史や文化にまつわる場所イメージを惹きさせるのである。そして、そのような場所イメージは、軽井沢に対して奥深さを付与すると考えられる。換言すると、『ヴィネット』という雑誌メディア自体が表象のレベルにおいて、「表面的な」軽井沢の消費への対抗の場として機能するのである。さらに、福田が竹富島における赤瓦の議論において述べたように、このような「情報の選択・強調・排除の過程」<sup>41)</sup>は、歴史や伝統・文化を強化していくことにつながるのである。

近年の表象の傾向として、主として「食」を取り上げ、ブランドとしての「質」を強調していることが明らかになった。このことは、第II章1で指摘したような進行する世俗的な景観変化に反応していると考えられる。つまり、軽井沢のブランドとしての「質」を担保するために、特に点在するレストラン（有名店が多く取り上げられている）を誌面という表象空間のなかで取り上げ、再構成す

ることで、後景化している旧来からの「高級イメージ」を、表象レベルで再び前景化させる営みなのである。

## 2. 『軽井沢ヴィネット』のアイデンティティ

特に2000年代以降、『ヴィネット』は不動産広告を掲載し、別荘の建設や取得を望む人々の潜在的なニーズに答えているといえる。しかし、別荘の建設には土地を造成するために一定程度の樹木の伐採が行われ、自然を切り開くこととなる。つまり、『ヴィネット』は、別荘文化の継承と軽井沢の開発（を助長してしまう）という、理念的に対立するはずの記事を掲載しているのであり、誌面構成上の矛盾を抱えているといわざるを得ない。そうであるからこそ、第III章2で触れたように、別荘建設の記事を掲載しつつ、周囲の自然保護を強調することで、どうにかバランスを保つほかはなかったのである。近年では、「自分の土地だから何をしてもいい」ということは、軽井沢では通用しない（No. 113、2013、93頁）と、敷地面積・塀の有無・壁の色・家屋の高さなどに言及し、あくまで

第3表 軽井沢の「変化」に対するおもな読者の声

年	No.	特徴的な表現
1986	23	おぼろげながら覚えている15年前の軽井沢に比べると随分雰囲気が変わっている
1987	25	軽井沢は心の休息の場所 この自然を守っていきたい 他の観光地と同じになりませんように
1991	46	…ヘイチゴ、最近見かけなくなりましたね 軽井沢の自然、これからも大切に守っていききたいですね
1993	53	だんだん軽井沢の自然が変わっていくのが、ちょっと淋しい
1994	60	自然を残し、自然と一体となれる軽井沢であってほしいと思います
1995	61	キャピキャピした場所より大人の雰囲気のしっとりとした街、緑の中に点在する街であってほしい
1998	70	あまりの変わりように浦島太郎の気分…もっともっと自然を大切にしたい
2001	80	あまり開発されたら、他にもいくらかもある風景になってしまいそう
2004	88	軽井沢の自然をこわすことのないよう「個」を単なる「個」としてでなく、全体の中の「個」として考えてほしい
2005	89/90	…落ち着きのある自然と調和の部分をずっと失ってほしくないと感じている今日この頃
2007	96	最近、開発が進み過ぎて、軽井沢の良さが失われているよう気がします
2008	99	不動産広告が一段と増えた気がします美しい軽井沢との共生をお願いしたい
2010	107	緑の美しい道など、軽井沢らしさがずっと残り続けてくれたら、これからもずっと軽井沢へ来続けたい
2011	108	これからの軽井沢は自然が破壊されていくようで心配です なんとかこの素晴らしさを守っていききたい
2012	111	街の発展が緑を失うことにつながっているという気持ちを強く持っています

軽井沢新聞社『軽井沢ヴィネット』の表中の各No.より作成。

第4表 軽井沢のあり方をめぐるおもな記事

年	No.	見出しと内容
1980	5	誌上討論会「軽井沢のココガイヤ！」
1981	6	誌上討論会「冷夏で軽井沢が変わったてホント！」
1981	7	誌上討論会「夏期アルバイトちょっとヒドイね！」
1981	8	誌上討論会「軽井沢の自然は守れるの？」
1982	9	誌上討論会「若い観光客が増えて別荘族はどこへ…？」
1982	11	誌上討論会「軽井沢は今、揺れている」
1982	12	誌上討論会「何故に軽井沢でテニス？」
1983	14	誌上討論会「オフシーズンの利用法」
1983	15	Vignette Salon「伝統が軽井沢を作る」「保存と開発の融合点」
1985	21	軽井沢と文化〈座談会〉軽井沢2世紀を考える
1986	23	FORUM「軽井沢の原点をみつめて」
1989	33	KCNのページ「看板を考える」
1989	34	KCNのページ「緑を取り入れた店づくり」
1990	37	KCNのページ「個性あるリゾート地の創造」
1990	41	KCNのページ「新幹線が通るとどうなる、軽井沢？」
1991	43	KCNのページ「軽井沢のイベントを考える」
1991	44	KCNのページ 座談会「若手新聞記者の見た軽井沢」
1991	46	KCNのページ「オフシーズン、軽井沢企業の戦略」
1992	48	KCNのページ「夏の人手対策は？」
1992	50	KCNのページ「女性経営者からみた軽井沢」
1992	51	KCNのページ「高速交通網に向けて別荘客から見た軽井沢の方向性」
1993	53	KCNのページ「様々な期待を担い上信越道が開通」
1993	54	KCNのページ「高速道路開通に伴っての影響と今後の軽井沢」
1995	61	KCNのページ「軽井沢の看板が変わった」
1995	63	KCNのページ「軽井沢駅周辺はどう変わる」
1997	67	座談会「リゾートから第二の故郷へ」 細川護熙「軽井沢のようなリゾートは、町づくりがもっとも大切」
2000	特別号	服部禮次郎「21世紀へ向けての軽井沢」 佐藤泰春「国際化する軽井沢の21世紀への提案」 街角ニュース「ふるさと公園着工」
2001	78	美しい村への序曲「明日の軽井沢のための第一歩」
2003	84	座談会「避暑地軽井沢120周年 明日の軽井沢への期待は…」
2006	95	座談会「軽井沢の真の活性化を考えよう」
2010	105	座談会「軽井沢と軽井沢の原点」
2010	106	対談「文化の薫る風土とは」

注：「KCN」とは「軽井沢コミュニケーションネットワーク」の略称である。

21世紀のリゾート軽井沢の街の発展を考えていくことを目的としている。

軽井沢新聞社『軽井沢めいと』、『軽井沢ヴィネット』の表中の各No.より作成。

も「自然の中に住まわせてもらっているという気持ちで」（同、91頁）と、別荘（や住宅）を建てることを従来よりも厳しめなコピーをもってさらに強調している。

自然の保護や景観に配慮する姿勢は、「読

者の声」において『ヴィネット』と同様の問題意識を持つ読者の投稿を掲載していることにも表れている（第3表）。このように、自然が失われることに危機感を抱く読者の声をも取り上げ、またそれらを利用すること

によって、自然保護と別荘建設のバランスの上に成り立つ〈軽井沢〉イメージを創り出していると解釈できよう。

また『軽井沢めいと』期から一貫して、軽井沢のあり方をめぐる記事を掲載してきた(第4表)。それらの記事では、「軽井沢の変化」(No. 5、8、11)、「交通環境の影響」(No. 41、51、53、54)や「将来の方向性」(No. 37、105、106、特別号)などが繰り返し議論されており、避暑地として100年以上の歴史を有する独自性と奥行きを深さだけでなく、同時に変わりゆく姿と行く末を考える記事を取り上げることで、軽井沢に対する問題意識をも醸成してきた。ここに高原誌たる『ヴィネット』の特徴を指摘することができる。歴史や自然、別荘景観を維持していくべき対象と位置づけることは、「軽井沢」そのものを維持していくことを意味する。そのような、「場所」を維持しようとする意志は、「軽井沢の自然・文化・歴史を伝え、文化向上に貢献しようという主旨」<sup>42)</sup>で雑誌を編集する『ヴィネット』が持つ、紛れもない軽井沢への愛着の表われであり、ローカルなメディアの場所に対するアイデンティティである。

以上のように、『ヴィネット』は、なじみのない空間を排し、軽井沢の場所イメージや場所の消費のしかたを歴史や伝統という文脈のなかに見出す方向性を前面に押し出した雑誌メディアである。しかしながら、そのような姿勢を表出しながらも、相反する記事を掲載するという軋轢のなかでバランスをとりながら、軽井沢という場所を表象していくのである。またこれらのことと同時に、軽井沢のあり方に対する議論をも展開していくことは、地域に根づく『ヴィネット』というローカルなメディアの態度であり<sup>43)</sup>、軽

井沢の歴史を語り、場所を価値づけていく営為が軽井沢の文化を守っていく立場を肯定すると考えられる。

## V. おわりに

本稿では、地域に根ざしたタウン情報誌である『ヴィネット』を資料として取り上げ、大衆化が進むなかで軽井沢をどのように表象するのかを検討した。

前身誌である『軽井沢めいと』期は、若者など大衆向けの記事構成の傾向が強いものの、読者の語りを盛んに利用しつつ、人々の営みのなかでオフシーズンの「静けさ」の魅力を表象した点は画期的であった。『ヴィネット』は、他のタウン情報誌や既存の雑誌メディアと差異化するために“高原誌”を自称することで、「軽井沢」を表象していく上での個性を打ち出した。「別荘訪問」などさまざまな特集や個別の記事を組み合わせることによって、避暑地・別荘地として外国人宣教師によって発見された軽井沢の歴史的な精神や、先人たちの伝統的な「ゆったりと自然に触れる」避暑生活の営みを丁寧に描き出すのである。このように歴史を語ることは、新しい消費スタイルへの対抗として軽井沢に豊富な地理歴史性を付与する。また軽井沢への別荘需要やその期待が高まるなか、別荘の所有を希望する読者の潜在的なニーズに対応しながらも、専ら軽井沢に別荘を持つことだけではなく、別荘文化の原点である宣教師たちが建てたような、軽井沢の自然に調和した別荘の建設を提案し、別荘景観の保全を志向する方向性も認められた。時代が下るなかで、別荘で「過ごす」ことにくわえて軽井沢で「暮らす」といった、別荘客(もしくは移住者)

向けの実用的な記事や、別荘生活・食を中心とした「上質」さを重視する快適で優雅な軽井沢ライフを追求する記事構成へと推移する。そのような変化の背景には、高速交通時代が到来し、軽井沢の観光地化・大衆化が叫ばれ、軽井沢のあり方が問われているなかで、あえて軽井沢のブランドとしての「質」を前景化させ、強調しているという一面があることが明らかとなった。

本稿では、いささか特異な性質をもつタウン情報誌を資料として取り上げた。しかしながら、タウン情報誌が持つ独自の「視点」からの表象は、街・地域のミクロなスケールでの表象やアイデンティティの諸相を明らかにすることができる資料となり、さらに、地域文化を考え、まちづくりの方策を決定していく一つの資料となり得る可能性がある。

最後に残された課題を挙げておきたい。本稿は『ヴィネット』という、軽井沢の大衆化が進む状況も関係して生みだされたローカルな雑誌メディアの記述における地理的表象を分析した。しかし、このような雑誌メディアという、特定の主体が自らの価値観を表出する表象空間に孕まれる文化的なポリティクスを十分に検討し、言及することができなかった。他方でタウン情報誌による、軽井沢という場所の地理的な「表象」の次元だけではなく、軽井沢における別荘地形成や観光地化の地理歴史といった現実的な空間に視点を移し、物質的（マテリアル）な「変化」を跡付けていくこともまた必要であろう。

〔付記〕本稿は2013年12月に立命館大学文学部地理学専攻へ提出した卒業論文を大幅に加筆・修正したものである。本稿の作成にあたって地理学教室の先生・先輩方に多くのご助言をいただいた。また、軽井沢新聞編集

長の広川小夜子氏には聞き取り調査に際して、軽井沢町立図書館のスタッフの皆様には資料を収集するに際して、多大なご協力をいただいた。ここに記して、心から謝意を表したい。

## 注

- 1) 軽井沢町誌刊行委員会『軽井沢町誌 民俗編』、軽井沢町誌刊行委員会、1989、290頁。
- 2) 原田ひとみ「“アンアン”“ノンノ”の旅情報—マスメディアによるイメージ操作—」、地理29-12、1984、50-57頁。
- 3) 内田順文「軽井沢における「高級避暑地・別荘地」のイメージの定着について」、地理学評論62-7、1989、495-512頁。
- 4) 成瀬 厚「商品としての街、代官山」、人文地理45-6、1993、60-75頁。
- 5) 三上恭子『「下北沢」という現代の盛り場の創出—若者の街考—』、理論地理学ノート10、1997、33-56頁。
- 6) 木田和海「タウン情報誌による京都の「街」の表象—都市空間イメージの地理情報の分析—」、立命館地理学20、2008、57-70頁。
- 7) 成瀬 厚『『Hanako』の地理的記述に表象される「東京女性」のアイデンティティ』、地理科学51-4、1996、221頁。また、成瀬によると雑誌メディア（週刊誌、各種情報誌）は、恣意性が小さく、消費者（読者）との関係が相互的で、雑誌の購買行為が個人に依存するという「文化的情報メディア」に分類される（前掲4）、74-75頁）。
- 8) 田村紀雄『タウン誌出版—コミュニティ・メディアへの招待—』、理想出版社、1980、36頁。
- 9) 前掲8）、30頁。タウン情報誌も成瀬のいう「文化情報メディア」であると考えられる。
- 10) 前掲8）、136-137頁。
- 11) 軽井沢町誌刊行委員会『軽井沢町誌 歴史編（近・現代）』、軽井沢町誌刊行委員会、1988、127-133頁。
- 12) 小林 収『避暑地軽井沢』、樫、1999、56頁。
- 13) 前掲11）、736頁。
- 14) 前掲11）、259頁。
- 15) 軽井沢文化協会創立50周年記念誌編集委員会『軽井沢120年—軽井沢文化協会創立50年—』、樫、2003年、39頁。
- 16) 1951（昭和26）年の「軽井沢町売春取締り条例」、1958（昭和33）年の「軽井沢の善良なる風俗維持に関する条例」の制定である。
- 17) 1963（昭和38）年には世界スピードスケート大会、1998（平成10）年には長野五輪のカーリング競技が行われた。また、通年型のカーリング施設が2013（平成25）年に開設された。

- 18) 1980年代の後半にはシブガキ隊、ビートたけし、とんねるずなどのキャラクター商品を販売する「タレントショップ」といわれる出張店が出店し、マスメディアに取り上げられることで相当の集客があったという。(①軽井沢新聞社『軽井沢ヴィネット No. 33』、1989、36頁。②軽井沢新聞社『軽井沢ヴィネット No. 71』、軽井沢新聞社、1998、84頁)。
- 19) 2001(平成13)年の「マンション軽井沢メソッド宣言」、2005(平成17)年の「軽井沢まちなみメソッド宣言」などである。
- 20) 旧軽井沢の商店街を形成するメインストリート。夏の賑わいのため、いつしか「旧軽井沢銀座(旧軽銀座)」と呼ばれるようになった。
- 21) 前掲1)、294頁。
- 22) ①日本電信電話株式会社電話帳事業部『全国タウン誌ガイド1988年版』、日本電信電話株式会社電話帳事業部、1989、136頁。②軽井沢新聞社『軽井沢ヴィネット No. 34』、軽井沢新聞社、1989、40-41頁。③広川小夜子『軽井沢取材日記』、軽井沢新聞社、2010、2-14頁。④2012年11月2日、『ヴィネット』編集部への聞き取り調査。
- 23) ①前掲22)①、248頁。②メディア・リサーチ・センター『雑誌新聞総かたろぐ2012年版』、メディア・リサーチ・センター、2012、199頁。また、「ヴィネット」とはフランス語系の英語で「描写する」の意味である。当時、軽井沢で宣教師をしていたサンディ・モース氏が考案した(2012年11月2日の聞き取り調査)。
- 24) 前掲22)②。
- 25) 2012年11月20日に『ヴィネット』編集部より電子メールで回答を得た。川端康成が軽井沢を舞台にした小説『高原』を書いたことは知られており、読者からも高い支持を得ているという。
- 26) 前掲7)。
- 27) 「おしゃべりサロン」は、後に「Free Time」、「読者のページ」と改称するが、創刊号から最新号までほぼ掲載される。
- 28) 室生犀星を父に持つ、室生朝子などである。
- 29) ①軽井沢新聞社『軽井沢めいと No. 11』、軽井沢新聞社、1982、19頁。②軽井沢新聞社『軽井沢めいと No. 12』、軽井沢新聞社、1982、7頁。
- 30) 「軽井沢の野鳥」は No. 16(1984年)～No. 72(1998年)まで全40回。
- 31) 「軽井沢文学歩」は芥川龍之介、室生犀星、堀辰雄など軽井沢にゆかりのある文学者を取り上げた記事である。No. 82(2002年)までで52回連載された。
- 32) 「軽井沢秘境探険」は19号(1985年)～No. 102(2007年)までで47回連載された。
- 33) 飲食店情報やイベント情報などのタウンガイドは『ヴィネット』のタウン情報誌という性質上要請されるものであろう。イベント特集号も発売されている。
- 34) 前掲18)①、7頁。
- 35) 前掲18)①、19頁。
- 36) 土地価格については、旧軽井沢地区はバブル期には坪300万円まで上昇したが、その他の地区では坪10万円ほどであったという(軽井沢新聞社『軽井沢ヴィネット No. 73』、軽井沢新聞社、1999、48-49頁)。
- 37) 軽井沢新聞社『軽井沢ヴィネット No. 98』、軽井沢新聞社、2007、98頁。
- 38) 前掲18)。
- 39) 1995(平成7)年に開業したプリンスアウトレットプラザに関する記事が取り上げられたことは管見する限り No. 77の1回のみである。
- 40) 佐藤守弘『トポグラフィの日本近代—江戸泥絵・横浜写真・芸術写真—』、青弓社、2011、198頁。
- 41) 福田珠己「赤瓦は何を語るか—沖縄県八重山諸島竹富島における町並み保存運動—」、地理学評論69-9、1996、734-738頁。
- 42) 日本電信電話株式会社電話帳事業部『全国タウン誌ガイド1985年版』、日本電信電話株式会社電話帳事業部、1985、117頁。
- 43) この点に関連して、本稿では詳細に分析していないが、『ヴィネット』は一貫して、特に冬のイメージを夏の喧噪と対比し、「冬しか見られない景観」という「贅沢さ」を記事にすることで、“意外”で新しい価値や認識を構築しており、新たな魅力を軽井沢に付与し、発信していると言える。